

児童の市民性育成をめざした地域教材の開発と授業実践

島津 俊之(和歌山大学教育学部地理学教室)
西川 恭矢(和歌山大学教育学部附属小学校)
橋爪 友美(和歌山大学教育学部附属小学校)
福井 規之(和歌山大学教育学部附属小学校)
生駒 真次(有田川町立藤並小学校)
細田 和希(和歌山市立雑賀小学校)

I はじめに

本稿は和歌山大学教育学部の2023年度「共同研究事業」に採択された標記の研究課題(課題番号16)の報告である。応募申請書に記載した「活動の概要」は、「小学校の「社会」や「総合的な学習の時間」において、主体的な社会参画に関わる資質としての市民性の育成に寄与しうる地域教材を開発し、授業実践に活かす方途を探る」というものであり、同じ申請書の「特記事項」欄には、「研究代表者が後期に担当する授業「郷土学習の理論と歴史」とのコラボレーションを図りたい」と記載した。ここでいう「研究代表者」とは筆頭著者の島津を指している。

研究代表者はこれまで、2018年度から4回にわたり公立小学校教員との共同研究に取り組んできた。前半の2回は、教員養成学部の授業に小学校での室内授業やフィールドワークへの参加体験を取り入れて、大学授業の実践性を高めることを主眼とした取り組みであった(島津ほか2019, 2020)。後半の2回は、小学校での室内授業やフィールドワークに大学教員や学生が参加することで、小学校授業の教科専門性を高めることを主眼とした取り組みであった(島津ほか2022, 2023)。これら過去4回にわたる共同研究の成果と課題を踏まえ、研究代表者は本年度、和歌山大学教育学部附属小学校の教員3名と和歌山市立小学校の教員2名を共同研究者として、「市民性の育成に寄与しうる地域教材を開発し、授業実践に活かす方途を探る」ことを通じて、大学授業と小学校授業の双方に寄与しうる共同研究の在り方を模索した。以下、II章では共同研究の事実経過について記し、III章で共同研究の成果と課題について記す。IV章はまとめとする。なお、本稿は研究代表者が筆頭著者として草稿を執筆し、共同研究者5名の確認を経たものである。

II 共同研究の事実経過

研究代表者にとって、附属学校教員と公立学校教員を交えた3者連携での共同研究は初めての試みであり、また、教育学部の社会科関連教員と附属学校教員との共同研究体制の(再)構築が要請される現今の状況に鑑みて、まずは附属中学校の山口康平教諭にコーディネートをお願いして、2023年4月14日(金)に附属中学校で最初の打合せを行った。出席者は島津と山口に加えて、後に共同研究者となる西川恭矢教諭と橋爪友美教諭であった。その結果、教育学部の社会科関連教員6名のうち、島津が附属小学校との共同研究に関わり、後の5名は附属中学校との共同研究に関わるという方向性が打ち出された。その後、附属小学校との共同研究は、本(2023)年度の附属小学校教育発表会でフィールドワークを導入した社会科の研究授業を行う予定の西川教諭と橋爪教諭、同じ趣旨で生活科の研究授業を行う予定の福井規之教諭と共にすることとなった。また、附属小学校の研究協力者である有田川町立藤並小学校の生駒真次教諭と和歌山市立雑賀小学校の細田和希教諭を共同研究者として加えた。

共同研究の最初の打合せは7月28日(金)に附属小学校で行い、島津・西川・橋爪・福井が参加した。そこでは、西川・橋爪・福井が各々担任する6年A組(社会科)、4年B組(社会科)、2年B組(生活科)の研究授業に向けて行うフィールドワークの構想が紹介された。その中で、地域教材を用いて児童に江戸時代を体感させたいとする西川教諭の構想に関連して、附属小学校の周囲を巡る「教材研究フィールドワーク」(京都乙訓ふるさと歴史研究会2020)を行う機運が高まり、8月9日(金)に実施することになった。附属小学校がある和歌山城周辺は、近世には和歌山城下町の上級・中級武家屋敷が建ち並ぶ地区であったが(額田・水田2008, 2016)、アジア太平洋戦争末期の空襲で和歌山城天守閣を含む市街地中心部は焼失し、近世城下町の面影を偲ばせる建物はほとんど残されていない。幸いにも、近世後期の名所案内書である『紀伊国名所図会』には当時の和歌山城周辺の風景を描いた挿絵が多く収載され、早稲田大学古典籍総合データベース(早稲田大学図書館2024)などを通じてウェブ上で閲覧できる。和歌山市立博物館が所蔵する「安政二年和歌山城下町絵図」(文化遺産オンライン2024)は詳細な彩色絵図で、同図の地理情報を現代の都市計画図に重ね合わせた城下町探検マップ「城下町が息づく和歌山を歩こう!」が刊行されている(額田・水田2008, 2016)。また、「安政二年和歌山城下町絵図」や『紀伊国名所図会』と現代の地図や風景写真を対照させたガイドブックである『和歌山城下まちしるべ』や『城下町の風景』も刊行されている(和歌山市教育委員会1987; 額田・芝田2009)。これらのマップやガイドブックは児童のフィールドワーク教材としても活用可能であり、島津はこれらの史資料類を地域素材として紹介するとともに、上記の「教材研究フィールドワーク」の案内役となった。8月9日(金)の当日の参加者は西川教諭と橋爪教諭で、島津は『和歌山城下まちしるべ』と「城下町が息づく和歌山を歩こう!」を資料として用意し、附属

小・中学校正門前から徳川吉宗生誕地を経て紀州徳川家菩提寺の報恩寺を拝観し、寺町を通過して無量光寺の首大仏を拝観し、『紀伊国名所図会』で名所とされた車坂稻荷社から原見坂に至るコースを歩いた。原見坂の西側に建つ禅林寺を拝観後、帰路は附属小・中学校が建つ丘陵地（おく山）の東麓を北上し、和歌山城の初代城主豊臣秀長の城代を務めた桑山重晴（1524-1606）の墓所がある珊瑚寺を拝観し、刺田比古神社や岡山時鐘堂の傍らを通って附属小・中学校正門前に戻った。この「教材研究フィールドワーク」のコース設定に際しては、上述の史資料類に加えて『和歌山県の歴史散歩』（和歌山県高等学校社会科研究協会 2009）が役立った。その後、8月23日（水）に附属小学校で開催された協力者会の社会科部会に島津がオブザーバーとして参加し、西川教諭と橋爪教諭の授業構想に大学側としてどのように関わられるかを話し合った。また、生活科担当の福井教諭からも協力者会の授業構想シートが提供された。この段階で、西川教諭は260年間続いた江戸時代をフィールドワークなどにより探究的に理解できる授業を、橋爪教諭は近世中期の治水家井澤弥惣兵衛（1663-1738）の探究的学習を通じて地域発展に尽くした先人の努力と意義を理解できる授業を、福井教諭は「身近な人々、社会及び自然」（文部科学省 2017a）としての和歌山城公園での活動を通して地域への気付きや愛着を育める授業を、それぞれ構想していた。これらの授業構想に、島津が受け持つ大学授業をどう関わらせるかを検討した結果、応募申請書に記した後期科目「郷土学習の理論と歴史」（初等教育コース小中連携プログラムの社会科教育専攻3回生の必修科目）の受講予定者（5名）に加えて、後期科目「教職実践演習」（4回生の必修科目）における島津の模擬授業準備ゼミへの配属予定者（初等教育コース小中連携プログラムの4回生8名）も参加させることとした。西川教諭は和歌山市立博物館との連携も視野に入れており、同館協議会委員を務める島津が仲立ちとなり、9月26日（火）に佐藤 顕学芸員と西川教諭と島津の3者で附属小学校での授業に博物館が関われる可能性について協議した。これは、10月20日（金）に佐藤学芸員が附属小学校にて江戸時代の和歌山の繁栄などに関する出張授業を行う形で実現した。

学生の附属小学校授業への参加は、①10月16日（月）、②10月18日（水）、③10月19日（木）、の3回にわたり行われた。①では、5時限（13:45～14:30）に行われた福井教諭の生活科の授業（2年B組）に「郷土学習の理論と歴史」の受講生4名と島津が参加し、3日後の和歌山城公園におけるフィールドワークの事前学習の進め方を実際に学んだ。児童はすでに2度にわたり和歌山城公園を「たんけん」しており（福井 2023）、本時ではさらに確かめたいことを「わか山じょう公園たんけんシート」に書き込んでいた。②では、西川教諭の社会科の授業の中で行われた附属小学校周辺のフィールドワークに「教職実践演習」の受講生7名と島津が参加した（写真1）。それまでに児童は江戸幕府や徳川家光の政治について学んでおり、本時では城下町探検マップ「城下町が息づく和歌山を歩こう！」を手に、「江戸時代の和歌山の様子に迫り、武士による政治の支配を多角的に考察する」（和歌山大学教育学部附属小学校 2023）ために幾つかの班に分かれて事前に設定した範囲を歩いた。学生たちは班に所属し、児童の安全に気を配りつつフィールドワークにおける児童の学びの現場を実地に体験した。③は①の事前学習を受けた和歌山城公園のフィールドワークであり、島津は当日所用で参加できなかったが、「郷土学習の理論と歴史」の受講生5名が参加し、児童の「もっと知りたい、調べたい」（和歌山大学教育学部附属小学校 2023）という気持ちに基づく「たんけん」を一緒に体感した。なお、橋爪教諭の4年B組では、10月5日（木）に井澤弥惣兵衛の出身地である海南市（海南市歴史民俗資料館と亀池公園）でフィールドワークを実施したが（写真2）、日程が合わずに大学側の参加は叶わなかった。

附属小学校の2023年度教育研究発表会は10月28日（土）に開催された。研究授業は第I部（9:10～9:55）と第II部（10:10～10:55）に分かれ、橋爪教諭（4年B組）の社会科研究授業「井澤弥惣兵衛、敗れたり?!～先人を通して見る和歌山県の今～」と福井教諭（2年B組）の生活科研究授業「2B わか山じょう公園たんけんたい」は第I部で、西川教諭（6年A組）の社会科研究授業「家光の政治を評価する—歴史から考えるよりよい社会とは?—」は第II部で行われた（和歌山大学教育学部附属小学校 2023）。橋爪教諭の授業は、これまでの調べ学習やフィールドワークを踏まえ、井澤弥惣兵衛が行った「一番すごいこと」を児童に発表させた後、井澤弥惣兵衛が改修した亀の川が本（2023）年6月2日（金）の豪雨で氾濫したことに触れ、井澤弥惣兵衛の偉業と現在の情況とのつながりを考えさせるというものであった。福井教諭の授業は、和歌山城公園で「調べたことや見つけたステキ」の発表の仕方についての児童自身の発案（「2Bの教室を和歌山城公園にしよう！」）を踏まえ（福井 2023）、班に分かれた児童が天守閣や動物園などを工作によって再現してゆく現場を公開するというユニークな内容であった。西川教諭の授業は、「家光の時代に生きた人々は不幸だったのか?」（西川 2023）という学習課題の下に、児童が司会を務めて徳川家光の政策についての評価を様々な視点から出し合い考えるというものであった。協議会（11:10～12:20）は生活科と社会科に分かれ、社会科の協議会は4年B組と6年A組の合同で行われた。島津は3つの研究授業と社会科の協議会に参加し、「郷土学習の理論と歴史」の受講生3名は福井教諭及び西川教諭の研究授業と生活科の協議会に、「教職実践演習」の受講生7名は橋爪教諭及び西川教諭の研究授業と社会科の協議会に参加した。社会科の協議会は共同研究者の生駒教諭の司会で行われ、共同研究者の細田教諭も参加した。なお、福井教諭の生活科授業で児童自らが発案した「2Bの教室を和歌山城公園にしよう！」は、最終的に11月11日（土）に開催された「おく山まつり」の展示ブースの1つとなり、児童が自らのフィールドワークの成果を工作物の説明やクイズなどを通じて来場者に披露した（写真3）。「おく山まつり」は附属小学校と同校育友会の共催行事であり、島津と「郷土学習の理論と歴史」の受講生1名が展示ブースを訪れて児童の説明を聴くことができた。また、橋爪教諭の研究授業との関連を念頭に置きつつ、島津は毎年後期に担当している「自然地理学」の初回授業

(10月3日(火))において、以下の4点に関してデータを示しつつ説明を行った。①6月2日(金)の豪雨は和歌山県北部から奈良県南部にかけて発生した線状降水帯に起因すること(六車 2023)、②当日の和歌山市の日降水量は199mmで1880(明治13)年の観測開始以来2番目に多かったこと(気象庁 2023)、③当日の豪雨における和歌山県の住家被害は2,322戸で全国で2番目に多かったこと(内閣府 2023)、④浸水被害に遭った紀三井寺団地一帯はすでに2020年発行のハザードマップで0.5m以上3m未満の浸水想定区域に含まれていたこと(和歌山市 2020)。これらのことを説明したパワーポイント資料を、研究授業終了後にフォローアップとして橋爪教諭に提供した。

共同研究のまとめの会議は12月27日(水)に附属小学校で行われ、島津・西川・橋爪・福井が参加し、「郷土研究の理論と歴史」の受講生2名の参加も得意意見交換を行った。2月10日(土)に開催予定の「2023年度和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告会」では、西川・橋爪・福井の3名が口頭発表を行う予定となっている。

Ⅲ 共同研究の成果と課題

まず、西川教諭の研究授業に対して幾つかの地域素材を提供し、「教材研究フィールドワーク」で『和歌山城下まちしるべ』や「城下町が息づく和歌山を歩こう!」を手にも附属小学校周辺を歩いたことは、6年A組におけるフィールドワークの実践に多少なりとも寄与したといえる。10月18日(水)のフィールドワークに参加した児童28名の振り返りデータ(西川教諭提供)によると、「今回のフィールドワークで江戸時代の和歌山を感じることができましたか?」という問いに対し、「とても感じた」が10名、「まあ感じた」が16名、「あまり感じなかった」が2名であった。自由記述では、「今回のフィールドワークで印象に残ったのは朝比奈惣左衛門の屋敷跡がとても大きいことにとってもおどろきました。その人はすごく偉い人だったからそれだけ大きい敷地を持っていて権力をたくさん持っていたんだなあとおもいました」や、「歴史は教科書だけでなく身近な、日常の中で通るようなところにもあるのだなと思いました」といったものがみられた。これらは、具体的な体験を通じて歴史の意味や意義を考えることができるという市民性の育成に、地域教材としてのフィールドの諸事物が多少なりとも役立っていることを示している。橋爪教諭の研究授業への寄与としては、井澤弥惣兵衛の治水事業が6月2日(金)の亀の川氾濫によって《敗れた》という発想が、和歌山大学教育学部歴史学教室の海津一朗教授がしたためた《落書》に端を発しており、そのことを島津が8月23日(水)の協力者会で口走ったことが、「井澤弥惣兵衛、敗れたり?!」という単元名の設定につながった。これに関しては、当該の豪雨が過去最大級の日降水量を記録し和歌山県内に大きな被害をもたらしたことや、すでにハザードマップで浸水の危険性が示されていたという情報を提供することができた。これらの情報は、「弥惣兵衛さんがしてきたことが負けてしまったってことなんかな?」(橋爪 2023)という問いかけに多面的に応えるための教材になりうるとともに、地球温暖化に起因する現在の災害に一市民として対峙するための教材としても機能しうる。福井教諭の研究授業への寄与としては、和歌山城公園でのフィールドワークに5名の学生が参加したことが挙げられる。このことは、2年生の児童にとって二重の意味で普段の室内授業とは異なる体験になったといえる。フィールドにおける外界の直接体験は、児童の《思考》や《学びに向かう力》を揺さぶり刺激する。そして、フィールドワークを共にした、教育実習生にも似た学生たちの存在は、児童にとって普段とは異なる新たな刺激になったと考えられるのである。学生たちが児童に付き添うことで、フィールドワークより安全に実施できるメリットもあり、この点は西川教諭の研究授業でも同様である。

教材開発の面での課題としては、附属小学校側の授業計画やフィールドワークの予定の把握が大学側でやや後手に回り、的確な地域素材の提供のタイミングを見定めることが難しくなってしまうことが挙げられる。公立小学校側の教材開発へのコミットメントにも、工夫の余地が残されている。大学・附属小学校・公立小学校の3者間のコミュニケーションの密度を、共同研究を継続してゆくことで高めてゆきたい。

今回の共同研究が、島津の大学授業やその受講生の学びに寄与した部分は大きい。そもそも、今回の共同研究に島津の担当授業の受講生を加えたのは、小学校教員の養成を主目的とした初等教育コースの学生に対して、自らのフィールドワーク授業の学習指導案づくりの糧としてもらうためであった。小学生のフィールドワークの現場に立ち会うことで、児童がフィールドでいかなる学びを体験したのか、そして、そこでは実際にどのようなことが起こったのかを実地に体感して欲しかったのである。これは、教員養成学部の学生を《メタフィールドワーク》にいざなう企てであった。私見では、教員養成のための大学授業は《インドアワーク》《フィールドワーク》《メタフィールドワーク》の三要素から構成される。ここでの《インドアワーク》とは、大学での座学や模擬授業などを指す。《フィールドワーク》とは、学校現場(学生にとっての《フィールド》)において室内授業(児童・生徒にとっての《インドアワーク》)に参加することを指す。そして《メタフィールドワーク》とは、地域(児童・生徒にとっての《フィールド》)において野外授業(児童・生徒にとっての《フィールドワーク》)に参加することを指す。つまりここでの《メタフィールドワーク》とは、《児童・生徒のフィールドワークに関する学生のフィールドワーク》を意味することになる(島津ほか 2020)。《メタフィールドワーク》は、教員をめざす学生にとって、教育実習や学校ボランティアではあまり経験できないフィールドワークの現場における学びのリアリティに触れられる貴重な機会となる。それは、フィールドの様々なヒト・モノ・コトを《子ども目線》で擬似的に追体験することでもある。今回の共同研究において、西川教諭のフィールドワーク授業に参加した「教職実践演習」の受講生たちは、この《メタフィールドワーク》から様々なことを学び取った結果、自分

たちの小学校社会科の模擬授業の主題として3年に配当される《安全マップ》づくりを取り上げ、附属小学校の児童が班ごとに学校周辺の危険な場所や安全の工夫がみられる場所をフィールドワークで見つけて地図化するという学習指導案を作成するに至った。この指導案は事前学習・フィールドワーク本番・事後学習の3段階に分けて作成され、学生たちは2024年1月18日(木)に事前学習と事後学習のパートに分かれて模擬授業を行った。そのいずれかが、2月15日(木)の模擬授業発表会で披露されることになる。福井教諭のフィールドワーク授業に参加した「郷土学習の理論と歴史」の受講生たちは、これに加えて事前学習と事後学習にも参加し、うち1名は「おく山まつり」における発表の場にも参加した。事前学習とフィールドワークにおけるデータ収集は主に《知識・技能》に関わり、事後学習や発表会は主に《思考・判断・表現》に関わるといえるが、「郷土学習の理論と歴史」の受講生は、フィールドワークをめぐる学びの全過程を《メタフィールドワーク》を核として垣間見たわけであり、現在はそれぞれフィールドワークを基調とする小学校社会科の学習指導案づくりに取り組んでいる。その成果は、1月31日(水)の「郷土学習の理論と歴史」の最終回授業の場で発表されることになる。反面、学生たちの学びは概ねフィールドワークや事前学習・事後学習の在り方をめぐる《実践知》のレベルに留まり、《理論知》あるいは《形式知》に基づいた「市民性の育成」に寄与しうる地域教材づくりといった観点からの指導は、研究代表者の力不足もあって充分には行えず、今後の課題として残されている。

今回の共同研究では、小学校での教育歴を持たない大学教員である研究代表者にとっても学ぶところが多かった。まず何よりも、福井教諭の2年B組、橋爪教諭の4年B組、西川教諭の6年A組の授業に横断的に参加することで、発達段階の異なる学年ごとに地域素材の選択や教材化のレベルが異なることを実地に学べた。また、学生たちと同じく《子ども目線》を擬似的に追体験することで、教員養成学部の授業実践や自らの研究実践にその体験をフィードバックできる可能性が見えてきたと感じる。特に印象的だったのは、「2Bわか山じょう公園たんけんたい」の発表が、生活科の教科書(村川ほか2020)にみられるポスターや画像といった二次元媒体ではなく、児童自らの発案によって工作物という三次元媒体を用いて行われ、これに口頭やデータ画像やクイズなどを通じての説明が付け加えられていたことである(写真3)。これは、まさに従来の《テキスト》に《アート》を上乗せしてフィールドワークの成果を伝達する試みに他ならない。かかる試みは、実は地理学の世界で「創造論的(再)転回 creative (re)turn」として、アートや創作活動を研究活動それ自体と等置したり研究成果の伝達手段と位置付けたりして(再)評価する近年の動向と見事に同期している(Hawkins 2020; Shimazu and Fukuda 2023)。附属小学校の「おく山まつり」の現場では、実は地理学の最先端の議論に呼応するかのような光景が、児童たちの発案によって繰り広げられていたのである。教員の《理論知》あるいは《形式知》と児童の《実践知》は、遠く隔たったまま無関係であり続けるのではない。様々な《知》は、実のところ、ネットワークを成して相互に結び付きあっている。大事なのは、その結びつきを見出す《知力》である。

IV おわりに

平成29年告示の小学校学習指導要領では、「社会」の「指導計画の作成と内容の取扱い」の2の(1)において、「各学校においては、地域の実態を生かし、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにするとともに、観察や見学、聞き取りなどの調査活動を含む具体的な体験を伴う学習やそれに基づく表現活動の一層の充実を図ること」という条文がある(文部科学省2017b: 178)。この条文の解説では、「**地域にある素材を教材化すること**、地域に学習活動の場を設けること、地域の人材を積極的に活用することなどに配慮した指導計画を作成すべきという指示がなされる。そしてそのためには、「**教師自身が各学校の置かれている地域の実態把握に努め、地域に対する理解を深め**」、「地域の素材をどのように受け止め、地域の人々や施設などからどのような協力が得られるかについて明確にす」べきであり、さらには、「第5学年及び第6学年においては、我が国の国土や産業、政治、歴史などについての理解を深めることが目標であり、地域教材を取り上げた学習にとどまることのないよう指導計画を工夫す」べきとの指示がある(文部科学省2017b: 141-142, 強調引用者)。かかる指示に応えるためには、何よりもまず小学校教員自身が地域調査の経験を積み、いかなる地域素材がどこにどのように存在しているのか、それらはいかにして入手できるのか、そして、入手した地域素材からいかなる地域情報をどのように引き出すべきなのかの見通しを立てられるようにしておく必要がある。実はこれらは、平成29年告示の中学校学習指導要領にいう「**地理的技能**」に他ならず、そこでは地理的技能が**地理情報を「収集する技能」、「読み取る技能」、「まとめる技能」**の総体と位置付けられる(文部科学省2017c: 78-79, 強調引用者)。かかる地理的技能の修得は、大学における地理学教育の基本的な目標でもあり、ここに大学の地理学担当教員と小学校教員の共同研究の意義が見出せる。また地理的技能は小学校教員を目指す学生にとっても、身に付けておくべき必須の資質であることは論を俟たない。ここに、本共同研究に学生が参加することの根拠を見出すことができる。

しかし今回の共同研究は、大学教員を頂点とするハイアラキカルな場ではなく、大学教員・小学校教員・学生に加えて、様々な局面で授業づくりに実質的に加わったゲストティーチャーや地域の方々、さらには保護者の方々をも結果的に巻き込むことになるマルチディレクショナルな場として在った。「児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにする」ことや、「観察や見学、聞き取りなどの調査活動を含む具体的な体験を伴う学習やそれに基づく表現活動」を充実させることは、小学校教員自身が取り組んできたことであり、小学校教員の養成に従事する大学教員やその指導下に在る学生は、そこから多くのことを学ぶ必要がある。そして、学びつつ小学校教員の授業に関与するこれら大学側

のアクターや、授業に関わるゲストティーチャーや地域の方々、さらには授業を参観する保護者の方々は、小学校教員の授業づくりにとっての傍観者というよりむしろ参加者として位置付けられる。これらの参加者は、必ずしも同一の時間空間には共存せず、むしろ、授業の単元計画の段階から単元終了後の振り返りに至る一連のプロセスの各々で授業者や児童と関わりつつ、授業づくりに参加してゆくことになる。今回の共同研究は、かかる《授業参加》の一形態として位置付けることができるだろう。

[引用文献・ウェブサイト] ※ウェブサイトは全て2024年1月19日最終閲覧

- 気象庁 2023. 過去の気象データ検索 観測史上1～10位の値(6月としての値)和歌山(和歌山県). https://www.data.jma.go.jp/stats/etm/view/rank_s.php?prec_no=65&block_no=47777&year=2023&month=6&day=2&view=
- 京都乙訓ふるさと歴史研究会 2020. 先生のための教材研究フィールドワーク. <https://twitter.com/kyootokuni/status/1223894741030297601>
- 島津俊之・三品英憲・山本彩朱 2019. 小大連携に基づく教員養成フィールドワーク授業の開発. 和歌山大学クロスカル教育機構教育・地域支援部門・和歌山大学教育学部編『平成30年度和歌山大学教育学部連携事業成果報告書』60-65. <https://doi.org/10.19002/wadaikzsh.2018.60>
- 島津俊之・三品英憲・山本彩朱 2020. 小学校授業と大学授業の協同に基づく「メタ授業」と「メタフィールドワーク」の開発. 和歌山大学クロスカル教育機構教育・地域支援部門・和歌山大学教育学部編『2019年度和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書』52-57. <https://doi.org/10.19002/wadaikzsh.2019.52>
- 島津俊之・三品英憲・宇治田乃・西岡俊揮 2022. 大学授業との連携による小学校の地域教材開発と授業実践. 和歌山大学教育学部教職実践支援ユニット編『2021年度和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書』102-107. <https://doi.org/10.19002/wadaikzsh.2021.102>
- 島津俊之・宇治田乃・平岡愛実・西岡俊揮 2023. 小大連携に基づく地域の教材化とフィールドワーク授業の実践. 和歌山大学教育学部教職実践支援ユニット編『2022年度和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書』69-74. <https://doi.org/10.19002/wadaikzsh.2022.69>
- 内閣府 2023. 令和5年梅雨前線による大雨及び台風第2号による被害状況等について. https://www.bousai.go.jp/updates/r5typhoon2/pdf/r5typhoon2_02.pdf
- 西川恭矢 2023. 生まれながらの将軍 家光の政治を評価する一歴史から考えるみんなが幸せな社会とは一(和歌山大学教育学部附属小学校教育研究発表会 2023 追加資料).
- 額田雅裕・芝田浩子 2009. 『城下町の風景一カラーでよむ『紀伊国名所図会』一』ニュース和歌山.
- 額田雅裕・水田義一 2008. 城下町が息づく和歌山を歩こう!(改訂版). 和歌山地理学会.
- 額田雅裕・水田義一 2016. 城下町が息づく和歌山を歩こう!(第3版). 和歌山歴史地理研究会.
- 橋爪友美 2023. 井澤弥惣兵衛、敗れたり?!～先人を通して見る和歌山県の今～(和歌山大学教育学部附属小学校教育研究発表会 2023 当日資料).
- 福井規之 2023. 2Bわか山じょう公園たんけんたい(和歌山大学教育学部附属小学校 2023 教育研究発表会生活科補足資料).
- 文化遺産オンライン 2024. 安政二年 和歌山城下町絵図. <https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/207854>
- 六車香奈子 2023. 和歌山県と奈良県で線状降水帯発生 災害級の大雨で交通機関への影響大. <https://tenki.jp/forecaster/muguruma/2023/06/02/23515.html>
- 村川雅弘ほか 2020. 『わたしとせいかつ下』日本文教出版.
- 文部科学省 2017a. 『小学校学習指導要領(平成29年告示)』.
- 文部科学省 2017b. 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』.
- 文部科学省 2017c. 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』.
- 和歌山県高等学校社会科研究協会 2009. 『和歌山県の歴史散歩』山川出版社.
- 和歌山市 2020. 亀の川洪水ハザードマップ. http://www.city.wakayama.wakayama.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/036/450/17.pdf
- 和歌山市教育委員会 1987. 『和歌山城下まちしるべ』.
- 和歌山大学教育学部附属小学校 2023. 『2023年度教育研究発表会要項 生徒エージェンシーの発揮に向けた各教科からの接近(1年次)』.
- 早稲田大学図書館 2024. 早稲田大学古典籍総合データベース. <https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>
- Hawkins, H. 2020. *Geography, art, research: Artistic research in the geohumanities*. Routledge.
- Shimazu, T. and Fukuda, T. 2023. Art and geographical thought: The different forms of the geographer's art? in *Call for abstracts for IGC 2024: Listing of sessions per commission*, ed. IGC 2024 Dublin, 158. <https://igc2024dublin.org/wp-content/uploads/2023/12/IGC-2024-Sessions-15.12.23.pdf>



写真1 附属小学校6年A組のフィールドワーク直前の打合せ（2023年10月18日 島津俊之撮影）



写真2 井澤弥惣兵衛翁之碑(海南市亀池公園)での附属小学校4年B組フィールドワーク（橋爪(2023)より転載）



写真3 附属小学校2年B組の「おく山まつり」での展示発表（2023年11月11日 島津俊之撮影）